

外畑 巖(藤田学園保健衛生大) 編
村山正博(聖マリアンナ医大)

運動心臓病学 —— 運動試験の理論と実際 ——

春見建一(国立療養所中野病院)

運動心臓病学という題で外畑教授と村山教授が本を出された。恐らく両先生の独自の造語ではないかと思う。序文では exercise cardiology=運動心臓病学とあるので、運動負荷と心機能、心臓病に関する学問という内容と理解できよう。最近のスポーツブームで、医学領域以外の人々でも、運動をすると、心臓をはじめとして、身体にどのような効果があるかについて関心が高まってきている。一方において、循環器臨床医の間では、虚血性心疾患の診断にスクリーニング的には先づ運動負荷をし、狭心症、無症候性虚血性心疾患等の有無を判断し、急性心筋梗塞後のリハビリには、運動負荷による運動耐容能が一つの重要な役割として知られている。更に最近では、学童検診、マラソン、水泳等のスポーツに参加する際の検診に運動負荷が求められてきているが、これは、虚血性心疾患の発見のみならず、不整脈の誘発、既存の不整脈の態度により、スポーツへの参加を判断しようとする動きである。このような意味では運動心臓病学は、循環器病専門医のみならず、一般実地医家、スポーツドクター更にはパラメディカルの

人にも必要となりつつある分野である。

このような時に外畑・村山両教授が中心になって本書を上梓されたことはまことに時宜を得たものと云えよう。本書は1運動試験の運動生理学にはじまり、方法・装置、実施法、心電図、核医学、臨床応用等7つの柱を立て、各分野を細分し、担当者を決め執筆が行われている。殆どが外畑、村山両教授の御関係の方ばかりであるようで、本書の統一性が保たれている。本書の小見出しだけでも270余りを数え、ある意味では、運動心臓病学の用語集、用語解説書性格もあり、読者は、運動負荷法、心臓リハビリに関する運動負荷領域について、殆どすべての疑問を本書により解決し得るものと信ずる。運動負荷におけるATの問題、各種活動のエネルギー消費量の表、運動時の血中ホルモン濃度のまとめ、運動の血小板機能に及ぼす影響に関する歴史的背景、トレーニング効果、病的心臓における限界等、up to dateな内容が前半にもなっている。

運動負荷法の所で、YMCA フィットネスプログラム、運動負荷プロトコルの選び方の他、

End Point 徴候、実技上の細かい注意点等親切的な記載が多い。運動による各棘波の変化の部分は、ベクトル心電図体表表面電位図がでてきており、各著者の研究成果が盛られており、心電学を専門とする者にも興味が持たれる所である。運動負荷心電図制定基準は村山教授が書いておられるが、御自分の日常用いられている基準もあげて頂きたかった所である。臨床の項では、外畑教授の虚血性心疾患の診断をはじめとして、広く文献のまとめが行われ、読者に有用な情報を提供してくれるものと信ずる。リハビリテーションと運動処方とは、最近特に重要な項目であるが、処方に対する臨床の裏づけが将来なされたらなと思った。一方において、運動負荷自動診断では“最終診断はよく訓練された医師に任されるべきであろう。”としているが、両教授の運動心臓病学に対する立場がにじみ出たものと云えよう。

内容を精しく紹介するよりは先づ本書の通読をおすすめしたい。類書は幾つかあるようにはじめに書かれているが、ここまでまとめた運動心臓病学は、本邦においては未だ無いと云えるであろう。編者と共に“Exercise cardiologyを志す第一線の臨床医師のみならず、ナース、保健婦、体育関係の多くの運動医学、健康医学の人”に広くすすめたい本である。(B 5, 頁 270, 1988, ¥9,579(税込), 医学書院 刊)